

群 教 セ	F09 - 01
	平 15.217集

# ほっとルームを中心とした不登校生徒への対応、不登校傾向生徒への支援体制・環境づくり

- 既存の組織やスペースの活性化をはかって -

特別研修員 岡崎 武 (新田町立木崎中学校)

## 研究の概要

本研究は、不登校対策に関し、既存の組織やスペースをどのように利用することにより、効果的な支援体制を築くことができるか明らかにすることとした。問題行動報告に終始していた生徒指導委員会でいかにして不登校に対するコンサルテーションの時間と方法を確保するか実践した。また、利用の少ない相談室を生徒が利用しやすいほっとルームとしてどう環境を整え、気軽な相談活動をどう行っていくか実践を試みた。

【キーワード：教育相談 チームサポート 生徒指導会議 相談箱の活用 事例研究会】

## 主題設定の理由

小・中学校での不登校児童・生徒の増加などの教育現場に関する問題がニュース等で大きく取り上げられている。不登校状態が継続している理由として「無気力」「不安など情緒的混乱」「あそび・非行」「複合」等あるが、実態を正確に把握しているか不明瞭な面もある。本校の不登校生徒についても、理由を考えて月例報告を行っているが、単純に分類できない面があり、生徒の現状も様々で不登校の原因等もはっきりしていないケースが多い。そうした生徒に対して、ケース対応の経験が少ない教師が個々に対応しても、的確に対応することは難しい。また、不登校を自分のクラス経営の問題ととらえ、精神的に追い込まれてしまうこともある。

また、中学校の現状として、不登校問題を話し合うべき生徒指導委員会なども、服装の乱れ、喫煙や暴力等の問題行動に振りまわされ、問題行動の報告やそれに対する対応についての話し合いが主になってしまいがちである。各学年の不登校生徒の状況報告の場面では、変わらずといった程度の報告であったり、お腹が痛いという理由で、誰々が休みがちです程度のものであったりした。その生徒に対する対応の方針等についてはほとんど話し合われず、担任任せという現状である。そこで、不登校生徒及び不登校傾向の生徒、保護者に対して心の教室相談員、各学年の教育相談担当教員、担任が事前に対応に関してミーティングを行い、支援活動に関しても共通理解をしておくことが必要となってくる。

こうした現状の中で、不登校傾向の生徒に対して、不安や悩みを取り去るような場が必要になってきていると考える。現在週に3回心の教室相談員がきているが、保護者からの相談や一般の生徒からの相談には敷居が高い状態である。そこで、プライバシー等に十分配慮して、気軽に相談できる環境づくりに心がけていきたいと考える。面談をしたり、電話相談したり、メッセージを送ったり等の場を設けることにより、不安や悩みを軽減する方法を模索していきたい。

不登校生徒を抱える先生に対しても、一人で対応するのではなく、現在行われている生徒指導

委員会等を利用しながらチームで対応するコンサルテーションを行う体制や環境を整えていきたいと考え、主題を設定した。

## 研究のねらい

不登校・不登校傾向の生徒並びに保護者に対して、関係する職員と生徒指導委員会等を中心に協力して、事前ミーティングを行い計画的・意図的に支援活動を行うことにより、不登校生徒の登校環境を整えることをねらいとする。また、不安や悩みを抱えた生徒に対する支援体制や環境をほっとルームを中心に整えることにより不安や悩みを軽減することをねらいとする。

## 研究の内容及び方法

### 1 研究の内容

#### <支援体制づくり>

今まで問題行動対策が中心であった生徒指導委員会の中で、不登校生徒に対する対応を話し合う時間を確保し、生徒指導主事、教育相談担当（私）、心の教室相談員、各学年の教育相談（生徒指導）担当職員、養護教諭等により、コンサルテーション活動を行う。

教育相談研修を行い、不登校問題に対する意識を高め、本校の不登校問題の現状を把握すると共に、スーパーバイザーとして臨床心理士をよび、不登校・不登校傾向生徒に対するアドバイスを受ける。研修会で作成した資料を個々の生徒の資料としてファイル化し、生徒の変容の様子を記録し、対応の資料として生かす。

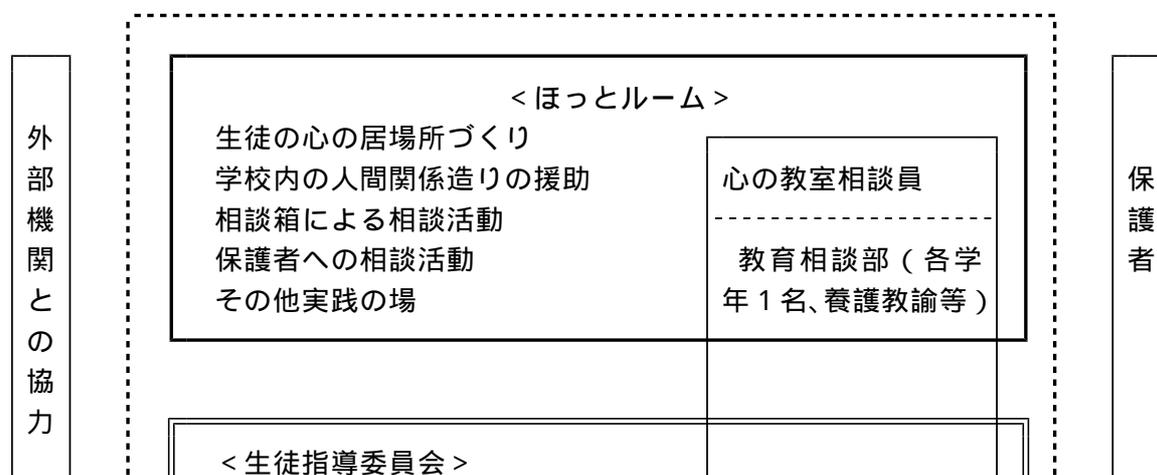
#### <環境づくり>

ほっとルームに対するPR活動を計画的に行い、ほっとルームの生徒に対する良好なイメージを作り、不安や悩みがあったときにほっとルームを利用しようと思う環境づくりを行う。具体的には、掲示板を設置し、情報交換活動を行ったり、相談箱を設け、生徒が悩みや不安を感じたときに面談したり、紙面相談したりすることにより、気軽に相談活動ができる手だてを試みる。

### 2 研究の方法

#### <支援体制づくり>

生徒指導委員会における不登校対策に対する組織作りを明確に行う。



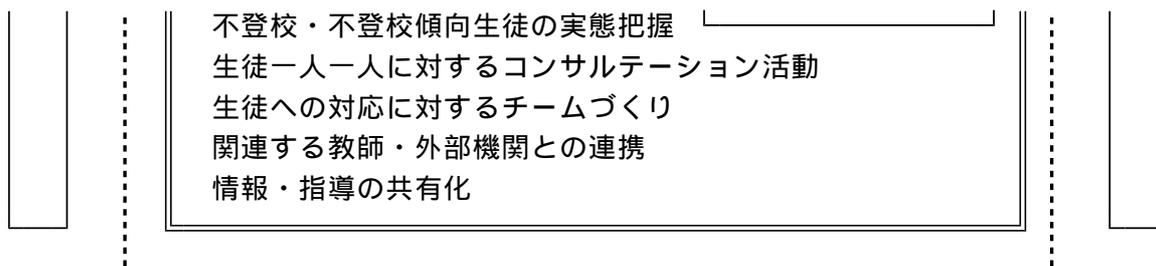


図1 ほっとルームの運営

教室登校できずにほっとルーム登校している生徒に対し、心の教室相談員と担任、相談担当の教員等が参加にむけて事前にコンサルテーションを行い、どんな支援活動を行うか事前に話し合い、共通理解しておくことにより、効果的な支援をおこなう。

また、学校内の人間関係を広めるため、小学校からの比較的心を許せる生徒と給食のときにテーブルを囲み、生徒の顔ぶれを少しずつ変えることで学校内での社会性を広める場とする。

夏休み中に二日間程度の研修日を設け、不登校・不登校傾向の生徒を取り上げ、その生徒たちに対する事例学習を行い、その際、スーパーバイザーとして臨床心理士にアドバイスをあおぐ。不登校・不登校傾向の生徒の基準として1学期に理由に関係なく、10日以上の欠席者を取り上げる（欠席年間30日の規定を考慮して）。事前に各担任には該当生徒の問題の概要、問題の理解に必要な資料、問題の理解、指導方針についての事例資料を用意していただく。また、その教育相談研修の中で、ほっとルームの運営についての話をし、教師間でほっとルーム運営についての共通理解をはかる。

<環境づくり>

現在ほっとルームは週に何回か不登校生徒が時間を過ごしている場、そのときに不登校生徒に関係する生徒が集まる場という特殊な場というイメージを持っている生徒が多い。ほっとルームの教室環境を整備したり、コミュニケーションがはかれるようなゲームを用意したり、利用のきまり等を保護者や生徒に対して計画的に広報活動したりすることにより、相談環境づくりに努める。

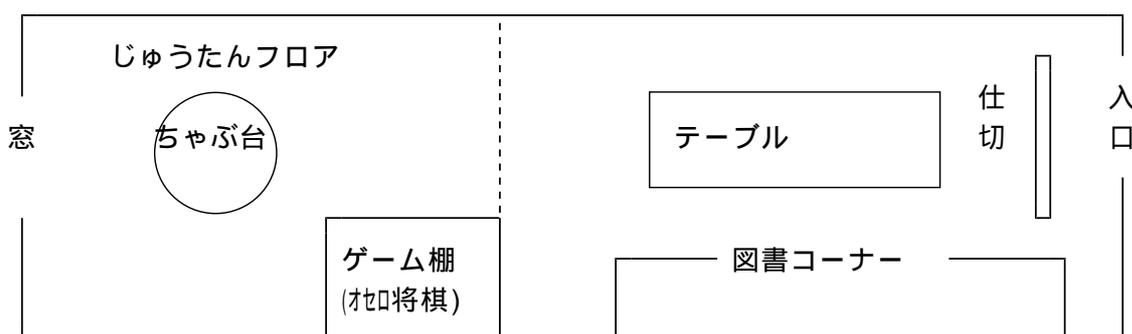


図2 ほっとルームの概要

掲示板を設置し、生徒の悩みやストレス解消の方法に関する広報活動を行ったり、ほっとルームについてのたよりを出すと共に、相談箱を設け、生徒が悩みや不安を感じたときに面談しやすい状況を整えたりする。その中で、自分のことだけでなく、他の生徒の心配の状況に対する相談を受け付け、生徒間の人間関係やトラブルに関する情報を得る。

方法として、生徒並びに保護者が時間を設定し、相談員と予約してカウンセリングを行った

り、相談カードを利用して相談内容、相談相手等をあらかじめ記入して相談箱に投函し、その相談に対して心の教室相談員または各教職員が生徒の相談にあたる。すべての対応を心の教室相談員に任せるのではなく、生徒に相談相手を選ばせるような工夫も行う。また、相談に関して秘密を守ることを強調しておき、生徒が相談に対して安心感がもてるよう配慮する。こうした相談活動を通して、生徒の相談環境を整える。

<h1>相談カード</h1>	
____ 学年 ____ 組 名前 _____	
相談内容（簡単に）	
相談希望日	____ 月 ____ 日（ 月・水・金・その他 ）
希望時間	昼休み・放課後（その他）
相談したい人	担任・相談員（その他）
相談に関して	秘密にしたい・関係のある人には伝えたい（その他）
心の教室相談員	専用電話 56 - （在中は月 水 金）

図3 相談カード

### 3 研究の実施計画

ほっとルームに関する支援体制づくりと環境づくりについて、表1のように計画を立てた。

表1 ほっとルームの実施計画

時期	ほっとルームの対応	支援体制	環境づくり
1学期	相談室だよりを発行 心の教室相談員とほっとルームの運営について話し合う。 全校の不登校傾向生徒に対する情報交換を行う。	生徒指導委員会で不登校対策に関する時間を確保することを確認。 毎週生徒指導委員会で不登校・不登校生徒に対する対応について話す。	ほっとルームに必要な備品・消耗品の洗い出し。
夏休み		全生徒に対して担任による教育相談を行い、気になる生徒の様子や親からの要望等をまとめ、教師間で共通理解をはかる。	備品・消耗品の購入、整備す

		<p>一学期の現状より、不登校・不登校傾向の生徒の理解のための事例資料を作成し、個別ファイルを作る。</p> <p>不登校・不登校傾向の生徒に対する事例研究会を開く。</p> <p>臨床心理士を招き、不登校・不登校傾向の生徒に対する対応についてのアドバイスを受ける。</p>	る。
二学期	<p>心の相談員とほっとルームの運営について話し合う。</p> <p>不登校傾向生徒に対する情報交換を行う。</p> <p>ほっとルームだよりを発行し、相談活動のPRを行う。</p> <p>掲示板を設置し、活動の状況を掲示する。</p> <p>相談箱を設置し、予約相談しやすい環境を整える。</p> <p>ほっとルームの利用状況についてまとめる。</p>	<p>毎週の生徒指導委員会で不登校・不登校生徒に対する対応について話す。</p> <p>必要に応じて他の関連機関との連携を検討する。</p> <p>不登校・不登校傾向生徒と担任・心の相談員のパイプ役を担う。</p> <p>個別ファイルに欠席状況や対応、その様子等を記入する。</p> <p>2学期の欠席状況の整理を行い、必要に応じて対応を話し合う。</p>	<p>ほっとルーム内の環境を整備する。</p> <p>利用者から要望を聞き、遊具等を含めて、必要な環境整備を行う。</p>
三学期	<p>ほっとルームだよりを発行し、相談活動のPRを行う。</p> <p>心の相談員とほっとルームの運営について話し合う。</p> <p>ほっとルームの利用状況について整理し、課題をまとめる。</p>	<p>毎週生徒指導委員会で不登校・不登校生徒に対する対応について話す。</p> <p>個別ファイルに欠席状況や対応、その様子等を記入する。</p> <p>3学期の欠席状況の整理を行い、課題をまとめ、必要に応じて来年度活動に生かす。</p>	来年度にむけて課題をまとめる。

#### 4 実践の概要

##### < 支援体制づくり >

生徒指導委員会において、各学年とも最初に不登校の報告を行うことを実行した。その際、病気を理由に報告をしない教師もいるので、あらかじめ養護教諭や欠席カードから欠席の状況を把握しておき、病気欠席の生徒に対しても、「この生徒は最近見かけませんが」と話題提供をすることを意識して行った。また、前回の生徒指導委員会で担任が家庭訪問をするなどの方向性が出された生徒に対しては、「家庭訪問をしてどうでしたか」と必ず確認するように意識した。生徒指導委員会は2学期末までに23回行われ、その最初にこうした不登校に対する話

し合いが行われた。時間の確保のために今まで報告してメモを取ることに終始していた問題行動の内容に関して、各学年の生徒指導担当者があらかじめ、パソコンのフォルダ内に入力しておき、メモの時間の短縮をはかった。その際情報管理について慎重を期すことを確認した。

相談箱を10月より校舎内2箇所に設置した。ほっとルームは裏校舎にあり、裏校舎は三年の教室があり、一・二年生が訪問しにくいと考え、前校舎の二階踊り場と裏校舎のほっとルーム横に相談箱を設置した。設置と共に放送委員会の生徒に昼の放送で「困ったことや悩みがあったら気軽に相談箱を利用してください」と流してもらい、全校集会の時に生徒に相談担当の私の方から連絡した。3日おきに相談箱を確認したが、相談カードは投入されていなかった。11月に第二回の「ほっとルームだより」を発行し、たよりの中に相談箱の利用に関する広報と保護者の悩み相談に関する広報を行ったが、それ以降も利用者はいない。



図4 相談箱

コンサルテーション活動を行う基礎として、臨床心理士を養護教諭の紹介を得て、8月7日（木）教職員カウンセリングも行っている富山美佳子先生をお呼びし、不登校・不登校傾向生徒に対するアドバイスをいただいた。対象生徒は一学期に心理的・病気に関わらず10日以上休んだ生徒を取り上げた。3学年で9名の生徒が該当した。このうち完全不登校が1名、ほっとルーム登校が1名、腹痛、かぜを理由に休んだ生徒が7名であった。事前に用意した資料をもとに情報交換、意見交換がなされ、対応に対するアドバイスを富山先生からいただいた。その中で、分からないことは本人に聞いたらどうですか。という言葉が印象に残っている。また、教職員に対するカウンセラーとして、いつでも気軽に連絡してほしいことを伝えてくださり、心の荷が下りたような気がした。このときに作った資料は個人ファイルとして残し、その後必要に応じて資料を追加した。二学期に心理的・病気に関わらず10日以上休んだ生徒は3学年で8名で、このうち完全不登校が1名、ほっとルーム登校が1名、原因不明の発熱1名、腹痛・かぜを理由に休んだ生徒が5名であった。

#### <環境づくり>

ほっとルーム登校をしているA男は、迎えに行かなくても自分で登校できるようになってきた。ほっとルームで行っているA男が得意とする将棋を目当てにほっとルームを訪れる生徒が増え、A男の人間関係も広まってきている。10月より女子の訪問も見られるようになり、将棋では対応できないので、オセロやジェンガなどのゲームも充実させると共に、時には寝ころんでリラックスできるように厚めのじゅうたんを敷き、ちゃぶ台を置いた。

### 研究の成果と今後の課題

#### 1 支援体制づくり

生徒指導委員会において、不登校傾向の生徒の報告とコンサルテーションの時間を確保できた。欠席状況をあらかじめ確認しておき、当該学年から名前が挙がらない生徒に関してはこちらから名前を挙げたが、家から熱・腹痛等で休みますと連絡が入っている場合、月に5日以上休んでいても名前が報告されないなどの事実があった。結果として1学期が終わったときの確認で10日以上欠席をしており、週単位での早めの対応の大切さを実感した。心の教室相談員は毎回生徒指導委員会に出席できるわけではなく、個人ファイルを生かしながら心の教室相談員と生徒指導委員会の不登校対応の連絡を取った。

相談箱を設置して気軽な相談活動を行う環境を整えようとしたが、相談の事例は今のところないのが現状である。広報活動として、担任からの紹介、お昼の放送での紹介、全校集会での紹介、ほっとルームだよりの発行を行ったが、相談カードは今のところ一枚も入っていない。相談相手として、心の教室相談員以外の先生も対象としているので、相談相手の問題ではなく、生徒が気の合う友達以外に相談して悩みを解決したいと思う経験がないことが考えられる。

不登校生徒に対する対応に関して教師は自信がないのが現状である。実際、一切登校刺激をしてはいけないと言われていた時期もあり、対応に関して方向性がなかった。臨床心理士のアドバイスをいただきながら、一つひとつの事例に関して検討していくことで、生徒の立場になって考えるという一つの方向性が出たように思う。

## 2 環境づくり

将棋、オセロ、ジェンガ、寝ころぶことができるスペースづくりにより、相談室登校の生徒の居場所が確保でき、相談室登校の生徒と他の生徒の関係づくりができた。

不登校生徒への対応について、教師同士の相談の場として気軽にほっとルームで話し合うような機能を考えてきたが、生徒指導委員会で話し合われた確認を職員室で行う程度で、時間的な制限もあり、教師間の気軽な相談環境としての機能をつくることはできなかった。

## 3 今後の課題

既存の組織とスペースの活性化をおこなうことにより、不登校・不登校傾向生徒への支援体制・環境づくりをめざしたが、支援体制づくりは教師一人ひとりの人間関係づくりが必要であることが分かった。環境づくりに関しては利用者である生徒の声を生かしたり、生徒の立場に立って考えることがその前提にあると思った。

生徒の欠席状況の報告に関して、教師により意識の差があり、かぜですませてしまう例が少なくなかった。但し、数字を確認することに主眼を置いてしまうと、責任追及の場になってしまうので、その生徒に対して担任、学年、相談員、生徒指導委員会、管理職がどう対応・援助していくか話し合い、実行していくことが大切である。加えて、普段からの教員同士の人間関係づくりが大切である。

相談箱は結果として今のところ利用者がいないが、相談の機会を広める一つ的手段として、必要であると考え。

不登校生徒、不登校傾向生徒に対する事例研究会は教師の不登校生徒に対する共通認識がはかれ、臨床心理士からのアドバイスも生徒に対する対応に参考になった。生徒の個人資料のファイル化も来年の担任に引き継いでいきたい。

掲示板を利用したストレス解消等の広報活動を引き続き行っていきたい。

生徒の意見や様子を参考にしながら、ほっとルームの環境づくりを続けていきたい。

### 主な参考文献

・石隈利紀・田村節子著『チーム援助入門』学校心理学・実践編 図書文化(2003)